

山林経営者の憂鬱と矜持

株式会社 T-FORESTRY

代表取締役 辻村百樹

(農林漁業信用基金運営委員会委員 (林業信用保証業務))

私は神奈川県と山梨県で山林経営をしておりますが、ルーツは江戸時代に小田原藩より商家であった先祖に下賜された藩有林であり、その後山梨に経営を広げました。従って明治維新から令和に至る我が国の木材産業の栄華盛衰のすべてを、山側として経験しています。その歴史を私から俯瞰すると、山林経営と現実経済の時間軸の違いに翻弄された姿が見えて来ます。

古代より自然の動植物が人間の生活を支え、衣食住の素材の多くは里山を中心に自然林や草原から得て来ました。ところが江戸時代以降の人口の急増や都市集中化が日本の森林を大きく変化させました。旺盛な需要から自然林は枯渇し、人の手による植林が始まり循環型林業が勃興しました。天変地異や争乱もある意味では木材産業を発展させました。一方で大震災や空襲による大火災が、日本の木質文化を一変させ、第二次大戦以降は国土不燃化政策と復興期の木材資源不足による輸入木材自由化が相乗して、結果として今日の国産木材不況に陥りました。ただ、ここで注意すべきはこの変化が200年の歴史でしかない事です。樹木の世界では200年は1本の樹齢に過ぎません。人の社会と樹木循環の時間軸の違いを認識しないと、林業の方向性を見誤る

恐れがあります。つまり林業、なかでも山林経営は現実社会と木の育つ時間軸の差を取り込まなければならず、眼前の社会や経済の動きは自然界の中では一瞬に過ぎず、そこでの一喜一憂による判断は馴染みません。所謂マーケティングの概念や即断即決が通じ難い世界なのです。



他方、社会や経済の動きは自然の摂理とは無関係に急速に変化し国際化を遂げており、林業界も変化に呼応してゆかなければ産業が成り立ちません。山林経営における自然と社会変化の時間軸の差は、新たな発想による多角的見地で素材生産の構造変化を補い、変革しなければ持続が不可能となります。そのためには資本や人材の増強と共に、新たな森林経営体の参入も図らねばならないと考えます。ただ現実を観ていると、新たな資本や参入者が森林の時間軸や特性をきちんと理解しているかは疑問無しとしません。戦後の社会構造変化により国産木材需要が減り、森林蓄積量は増加を続けています。この資源の活用が重要課題なのは言うまでも無い事ですが、過去を知り未来を見通す意識と慧眼を持つ事の重要性を強く感じています。今在る森林は過去の歴史の産物であり、人が手を加えた森林は将来に亘って人が関与する責務を負わなければ、荒廃した山という負の遺産を次世代に残してしまいます。

持続可能な林業は川上から川下までそれぞれが適切な資本を得て、循環して行かねばなりません。そのためにはそれぞれの担い手が100年単位の時間軸を理解して、ビジネスを組み立てる事が重要です。その過程で資金或いは人材を如何に適切に流動させるかが問われています。

山林経営者の憂鬱は、先人が植えてきた資産が次世代に繋がる資本にならない現実に直面している事です。しかし同時に歴史を背負

い国土の一翼を担う者としての矜持も常に持ち続けています。憂鬱を打破して矜持の強化へ変化させなければならぬ山林経営にも、輸出拡大やカーボンオフセット等の環境貢献といった新たなビジネスチャンスが生まれています。歴史を踏まえた時間軸の中で、時代の変化を敏感に取り込むという林業の特殊環境では、金融行政においても新発想の施策を望みたいと思います。今起きている窮地を救う短期施策、歴史を踏まえて生命を繋ぐ樹木の特性をも考慮した中期施策、マーケティングとは概念を替えた100年単位の長期施策、それぞれの異なる視点を網羅し地域特性も十分に加味した政策が、真の持続可能な森林国土を創り上げると信じています。

辻村 百樹 (つじむら ももき)



1956年生まれ
辻村農園・山林代表
㈱T-FORESTRY代表取締役
日本林業経営者協会副会長
神奈川県林業経営者協会会長
小田原市環境志民ネットワーク
会長
農林漁業信用基金運営委員会
委員 (林業信用保証業務)

1979年いすゞ自動車㈱入社 商品企画、宣伝、広報、アメリカ駐在等を歴任。

2007年神奈川県と山梨県で江戸時代から続く山林・農園を継承(八代目)。

2010年㈱T-FORESTRYを創設し山林経営と共にメガソーラー発電所やフォレストアドベンチャー・フォレストバイクなどの多目的森林活用を展開。

農林産物生産・エネルギー創出・生態系保全・余暇提供など、里山としての役割を最適バランスさせた、先人の想いと未来を繋ぐ数百年単位の永続的な美しい森創りを推進している。